museum

こうちミュージアムネットワーク通信

第２号　　2004年３月

目次

土佐の文化財…１　随想「植林の行方」…２　文化の言葉「現地保存」…２　会員紹介「高知市教育委員会生涯学習課文化財室」「香北町立やなせたかし記念館」「中村時計博物館」「金剛頂寺霊宝殿」…３　活動報告「専門研修会」…４　時の話題…４　総会報告…５　コラム「いままでの『引用』ー本当にそれでよいのだろうか」…５　現場通信「『世界のスパイス展』の展示デザイン」…６　展示会批評「文学･青春展」…７　図書の窓「地域に生きる博物館」…７　情報コーナー…８

土佐の文化財

石川寅治（1875ー1964）
伯爵板垣退助像（60歳）
1896年（明治29年）
カンヴァスに油彩　84.8×60.7㎝
高知県立美術館蔵

板垣退助はいわずと知れた明治の元勲であり、この肖像画は板垣が六十歳の時のものである。豊かな髭をたくわえた板垣を左斜めから捉えた、誠に堂々とした作品であるが、これを描いた石川寅治は、この時、弱冠二十一歳であったことは驚嘆に値しよう。明治二十九年といえば板垣が第二次伊藤内閣の内務大臣という要職に就いていた時期であり、いかに将来有望視され、また同郷の誼があるとはいえ、二十歳そこそこの画家の卵に肖像画を描かせるなど、明治の大政治家とはなんとも鷹揚なものである。

いずれにせよ、生涯にわたり数多くの肖像画を描いた画家の作品の中でも、これはまぎれもなく傑作の一つである。既に油彩画の技法は完成の域に達しており、長らく高知城懐徳館に寄託されて（あまり良好とはいえない環境で）展示されていたために煤や埃に覆われていたものの、絵具は支持体の麻布にほぼ完全に固着しており、小山正太郎門下の「旧派（脂派）」としての技術の確かさを窺わせた。先年、展覧会に出品するために修復した際には、カビ除去のための燻蒸と表面のクリーニングのみで、往時の色彩の輝きと繊細な筆遣いの冴えを回復したのである。

（高知県立美術館　奥野克仁）

随想

植林の行方

斎藤政広

昭和三十年代から四十年代前半、まだ家庭の燃料は薪や木炭でした。山間部の農家の多くは、冬場の農作業の少ない時期、雑木林を伐採して薪を作り、又、木炭を生産して生活の糧としていました。その雑木林を伐採したあとに、杉や檜の植林をしていきました。植林をするということは、その家の将来設計の基本となるくらい重要なもので、四十年くらい経てば大きなお金が入る、そのため、仮に自分の時代に使えなくても、子どもや孫の時代にはと思い、寸暇を惜しんで行ったものです。

植林作業は大変な重労働です。三〇～五〇㎝くらいの苗を束にして山まで担いで登り、山の斜面に一本一本苗を植え付けます。植え付けた次の年からは除草が必要で、最低五年から七年くらいは毎年夏の雑草が伸びる時期に草刈りをします。その後も蔓の取り除きや間伐、枝打ちと十年、十五年と管理をしなければなりません。

こうした作業は家族総出で行います。子どもも働き手のひとりです。遊びたい盛りのとき、朝早くから山へ出かけ夕方まで仕事をし、時には暗くなってから帰ることもありました。働き手の少ない家庭や資金のある家庭では人を雇い植林から手入れまでやってもらいます。そのため、こういう山仕事を専門とする職業の人もたくさんいました。今思うと、山仕事の休憩時に、親から山のいろいろなことや昔話を聞かせてもらったことが、その後の自分の生活にとても役立っています。

このようにして手入れした植林が高値で売れる時期がありました。四十年くらいと思っていたものが、少し手入れをしただけでかなりの値段で売れたわけですので、一層植林に熱が入ります。この収益で次の山へ投資をしたり、家を直したり、車を買ったりと、思わぬ収入で生活が一変しました。でも、このような景気も陰りが見え始め、植林の価値はどんどん下がっていきます。外国材に押され、又、住宅事情の変遷等により、値段の高い国産材は敬遠されるようになり、山仕事に携わる人もすっかり減り、山は荒廃の時代へと入るわけです。

さて、このような歴史をもつ植林をこれからどうすればよいのでしょう。もともと四十年経てばという思いで植林を始め、国の政策にも押され、それなりの投資をしてきた木が四十年経っても売れない。しかし、愛情込めて育ててきただけに安価では手放したくない。どうすることもできず、新たな投資もできず、ただ時が経過するだけの植林。今、山深いところへ行くにも林道が整備され容易に行くことができますが、昔植林をするころは、ここまで何時間かけて登ってきたのだろうと、当時の大変さを思い浮かべます。当時の作業小屋や炭焼き小屋の跡を見ると、わずか四十年くらい前までこのようなことが行われていたのだと、時代の進み方の早さを感じます。また、山の中腹まで耕作をしていたと思われる段々畑の石垣の跡、その段々畑は今では昼でも薄暗い植林となっています。

自然志向の中、自然環境について改めて考える時代になってきました。高知県では森林環境税の導入やこうち山の日の制定など、森林に関する意識が変わりはじめています。山の歴史と現状を十分把握しながら、生き物すべてが共生できる環境づくりに向けて、できることから実行したいものです。

（越知町立横倉山自然の森博物館館長）

文化の言葉

「現地保存」

かつて、博物館や資料館は、さまざまな地域の歴史資料の所在調査を行い、調査にとどまらず、積極的に資料そのものを自館へ収集していました。資料の収集は、原物を展示する博物館施設ではある意味当然のことであり、同時に、現地の資料の散逸を防ぐとともに、新たな資料の発掘にもつながり、歴史研究の上でも大きな成果をもたらしました。

しかし近年、地域の歩みを伝える資料が地域から離れることへの疑問が投げかけられ、資料が本来あるべき場所についての議論がされるようになってきました。その結果、現在では「原則的に地域の資料は現地に保存する」という方針をとる文化施設や歴史研究者も多くなってきました。

現地での保存と活用を実際のものとするために、調査の際に、地元の所蔵者に対して資料の重要性や保存技術に関する助言を行うことが大事になってきます。自ずと、資料調査の方法にも工夫が必要となります。これではじめて、地域の資料が真の意味で地域のものとなるのです。

これらをはじめとして、当然だと思われている博物館の諸活動は、いまいちど見直される時期がきているのかもしれません。

（土佐山内家宝物資料館　藤田有紀）

会員紹介

【高知市教育委員会　生涯学習課　文化財室】

高知市の生涯学習課は、現在県民文化ホール高知市分館一階にあり、管理係・公民館係・文化財室の三係から構成されています。

文化財室では主に、国指定重要文化財建造物・高知市指定文化財を含む七つの文化財施設の管理、高知市内にある文化財の保護・整備、高知市内の埋蔵文化財調査、文化財施設での普及行事を行っています。七つの施設とは、旧関川家住宅民家資料館（一宮）、旧山内家下屋敷長屋展示館（鷹匠町）、大川筋武家屋敷資料館（大川筋）、濱口雄幸生家記念館（五台山）、寺田寅彦記念館（写真＝小津町）、大津民具館、介良民具館です。（いずれも入場無料）

平成十六年秋には、平成十四年に高知市の文化財史跡の指定となった田中良助旧邸（柴巻）も落成し高知市で管理する予定になっています。

ぜひ、サイクリングやドライブの際には、一度お立ち寄りください。

（高知市教育委員会生涯学習課　丸山和代）

【中村時計博物館】

時計の博物館は全国的にも大変少なく、中村時計博物館を入れても五～六ヶ所しかありません。そんな中でこの館の保有するゼンマイ式、重り式の機械時計の数は全国一の多さです。保有する四〇〇〇個を超える時計の中から、一三〇〇個を選び館長自身が修理をして展示してあります。また、展示品は、たえず、別の物との入れかえを行っており足を運ぶたびに、新しい発見があります。特に三つのゼンマイ式の掛置時計「ウエストミンスター付」の数量とかたちのうつくしさは、アンティークファン以外の人でも、一見の価値があります。また、昔、遠洋航海には欠かせなかった、海洋船舶時計「マリンクロノメーター」そして大きな古時計の唄で有名な「グランドファーザークロック」そして、五〇年～六〇年前ならどこの家庭にもあった八角形のボンボン掛時計、なつかしい懐中時計等と、入館した途端に遠い昔の思い出がよみがえります。「中村時計博物館」は、展示した古時計を見ていただくことにより、見た人が時計の中の一つに、遠い昔の辛かった日々、嬉しかった時、又なつかしい人達を想いおこし、そしてその心が、現在と重なり合い未来への「みちしるべ」となってくれることを願って、皆様方の御来館をおまちしております。

【香北町立やなせたかし記念館】

やなせたかし記念館は、平成八年に開館した「アンパンマンミュージアム」に始まり、「詩とメルヘン絵本館」、そして「別館」という三つの施設で構成され、香北町に縁のあるマルチアーティストやなせたかしの多彩な創作世界の紹介を行っています。

やなせ氏の代表作「アンパンマン」に関連する展示と、ライフワーク・雑誌『詩とメルヘン』の作品を常設展示としている他、幼児からお年寄りまで一緒に楽しめる気軽な美術館として、国内外の漫画家・絵本作家・イラストレーターの作品展示やおもちゃ・遊びに関する企画展、作品公募展・コンサート等を年数回実施しています。

館のコンセプトである、アンパンマンの精神「愛と正義と勇気」。この共通のテーマのもとに幅広いジャンルの芸術文化を支援し、情報を発信することが目的です。

地域住民の文化活動支援の拠点であると同時に、世界中のアンパンマンファンの聖地としての期待に応え、また、やなせたかしが創作のうえで大事にしている時代や流行に左右されてはならない、精神性・叙情性を伝えて行く記念美術館として活動していきます。

（香北町立やなせたかし記念館　田所菜穂子）

【金剛頂寺霊宝殿】

当館は四国霊場第二十六番札所金剛頂寺の境内にあり、弘法大師・空海の開いた真言密教に関わる宝物が多数展示されています。金剛頂寺（通称土佐西寺）は空海により開創され、勅願寺として平安時代から続いている寺院で、室戸の歴史や当時の都であった近畿圏内の寺院とも非常に重要な関わりがあったところであります。

当館は昭和三十四年に国の文化財保護事業として、正倉院様式の鉄筋造りで建立され、寺宝である**真言八祖像や金剛旅壇具など**の国の重要文化財の七点をはじめ、他多数の仏像や掛け軸などが展示・保管されています。また別館として四国霊場に関わるものの展示室があり、さらに境内には牧野博士によって名付けられた天然記念物の奴草（ヤッコソウ）が生息し（十一月頃）、そして鯨の供養塔などもあります。

当館の開館には休館日はありませんが、予約が必要であります。

（金剛頂寺霊宝殿　坂井智空）

活動報告

専門研修会
「公文書資料保存に関する講演会」報告

二十一世紀の地域創造とアーカイブズ資源

地域に残る家や団体の記録文書から、現代の公文書やデジタル情報にいたるまで、人々の活動から生み出されてきたさまざまな記録物（アーカイブズ資源）が今、市町村合併、過疎による共同体の崩壊などにより、消滅の危機に瀕している。これらのアーカイブズ資源をどのように保存し活用していくべきか、「公文書保存利用研究会」と共催で研修を行った。

日時　平成十六年二月二十五日（水）
会場　高知県立文学館ホール
講師　安藤正人氏
（国文学研究資料館史料館教授）
参加者　施設担当者及び行政担当等

安藤氏はいくつかの実践例をあげて、これからの方向性を示された。

〈事例1〉愛媛県城川町文書館

高知県と境を接する愛媛県城川町、人口四、七〇〇人ほどの山間の町に全国で二番目という町立文書館がある。旧銀行を利用した建物、民間団体（史談会）への運営委託、日本全国から集まるボランティア館員などユニークな運営形態は、地域の歴史資料を守り、未来へ伝えようという人々の運動が実った成果である。

今後、公文書の収集保存や建物の耐水・耐火性など課題は多いが、合併後誕生する西予市においても、城川が主導して文書館システムを導入するよう提案を行っている。

〈事例2〉熊本県天草アーカイブズ

過去の記録を保存して歴史を伝えるだけでなく、現代社会にどう活かしていくか、二〇〇二年に熊本県本渡市に設置された市立公文書館「天草アーカイブズ」では、設立の目的として以下の三点を掲げている。

（1）行政文書や地域史料を、新しい地域創造のための文化情報資源として保存活用する。
（2）住民に対し現在の新しい行政情報だけでなく過去の行政情報をも公開することによって、本当の意味での情報公開やアカウンタビリティ（自己説明責任）を実現する。
（3）地方自治体自身が自らの過去の行政記録を情報資源として積極的に活用し、行政の高度化、効率化に資する。

以上のように「天草アーカイブズ」は記録史料を歴史の研究材料としてだけでなく、行政、経済、教育、生活に「情報資源」として役立てるという観点から活動を行っている。

これらの事例から、安藤氏は、文書館、公文書館は、単なる古い記録の保存庫ではなく、住民本位の民主的な行政を実現し、歴史と文化に根ざした活力ある地域を創造していくために不可欠な、二十一世紀的な地域情報センターといえるのではないかと結ばれた。

「地域情報センター」という発想は、公文書館ばかりでなく、これからのミュージアムにとっても重要ではないだろうか。私たちも、地域に根ざした活動を積み重ねて、情報センターとして、地域の内外から頼られる存在となるようめざしていきたい。

（公文書保存利用研究会　小林和香）

時の話題

接遇は戦術

公立の文化施設の管理は、大きな転換期を迎えています。

例えば、高知県立美術館で言いますと管理はこれまで、当財団が一手に引き受けてきました。

ところが、地方自治法の改正により、民間の事業者も管理を行うことができるようになりました。

この仕組みを「指定管理者制度」と言います。目的は、

・住民サービスの向上
・コストの削減

にあります。質の高い展示を安い入場料で行う民間の事業者が現れると、管理はそこに指定されることになります。

文化施設のサービスの原点は、よい企画をよい雰囲気のなかで鑑賞していただくことです。

上質のサービスは、お客様にたびたび足を運んでいただくための戦術なのです。その戦術に欠かせないのが接遇です。

また、競争相手が現れる「指定管理者制度」に打って出るためにも、お客様に満足していただける接遇はとても大切な戦術です。

（財）高知県文化財団専務理事
松岡寿子

総会報告

※平成十五年度事業報告

【企画調整部会】

・県教委と学校連携に向けた協議

・県立図書館資料整理作業への協力

・会報誌の編集発刊

【研修企画部会】

・専門研修会の開催

東京文化財研究所地域実務者セミナー、文化施設における接遇研修、公文書保存研修会Ⅱ、博物館・美術館の著作権問題研修

・県外研修への会員派遣と報告会文化財虫菌害保存対策研修会、アメリア・アレナス鑑賞教育セミナー

【教育普及部会】

・博物館、資料館等施設アンケートの実施と報告書編集

※平成十六年度事業計画

【企画調整部会】

・県内歴史・美術・文学資料の民間所蔵状況の調査検討

・会報誌の編集発刊

【研修企画部会】

・専門研修会の開催

・県外研修への会員派遣と報告会

【教育普及部会】

・県内博物館等文化施設共同利用ガイドの作成

なお、任期満了に伴う役員の改選の結果、全員継続となりました。

（土佐山内家宝物資料館　渡部淳）

コラム

いままでの「引用」―本当にそれでよいのだろうか

総会記念講演「博物館・美術館等と著作権」講師
京都大学大学院法学研究科助教授　西村　泰雄

博物館や美術館等において展示を行う際に、解説用のための「パネル」が作成されることがある。この「パネル」には、展示資料等をより詳しく説明するために、様々な情報が盛り込まれることとなるが、そこには既存の事典や図鑑等から「引用」されるケースも珍しくない。多くの館では、その「引用」について、特段に誰かからの了解等を得ることは為されていない場合が多いようであるが、本当にそれでよいのだろうか。

確かに、著作権法は、著作物を権利者に無断で利用できる場合としての引用を認めている。しかし、それは、一般に「引用」とされるものよりも相当に限定的なものと理解すべきである。例えば、ある特別展の開催にあたり、その開催趣旨を主催者が説明する文書の中に、当該画家や作家の人となりを紹介するに不可欠な既存の小説の一部を取り入れるといったケースは、明らかに適法な引用であろう。なお、ある動物の写真パネルを作成するときに、当該動物の体長、体重や主な生息地といった情報を既存の図鑑から取り入れるといったケースは、これら事実そのものである情報はそもそも著作物ではないから、その利用は自由である。ここで問題なのは、ある動物の写真パネルを作成するときに、既存の事典から、当該動物について記述された一項目をそのまま取り入れるといったケースである。

著作権法が認める引用は、一般には、「主」となる著作物（自らが創作している著作物）の中に「従」となる著作物（既存の著作物）を取り入れることと解されている。つまり、この問題のケースには「主」となる著作物が存在しないことから、「引用」ではなく、単独で既存の事典の一項目を「利用」（複製）していることとなるのである。もっとも、この「既存の事典の一項目」がそもそも著作物でなければこの問題は生じないが、一般に、「辞典」とは異なり「事典」の一項目は、ある程度の分量で詳細な解説が加えられており、「言語の著作物」となっているものが多いものと思われる。よって、このようなケースでは、通常の利用として、原則的には、権利者から了解を得ることが必要となるのである。

いま、権利者の方々は、政府の「知的財産立国」政策の追い風を受けて意気軒昂である。もはや、従来のように「公共施設だから」や「教育・文化目的だから」で看過されていた時代ではない。博物館・美術館等関係者の方々も、この「風」を感じて、従来のやり方が「本当にそれでよいのだろうか」と御一考願いたい。

現場通信

企画展オリジナルキャラクター
トウガラシのカプシくん
Capsicum spp.

「世界のスパイス展」の展示デザイン

里見　和彦

牧野植物園の園内に牧野富太郎記念館が新設され、五回目の春を迎えました。当館では常設展示のほか、牧野博士の顕彰と、人と植物のかかわりをテーマとした企画展示を年に三本開催しています。今回は開館以来十五本目の企画展示であった「世界のスパイス展」について、デザイン等製作現場の舞台裏をお伝えします。

「牧野植物園の展示」

当園では企画展示の際、制作運営のとりまとめやデザインは学芸スタッフが行いますが、展示の内容によって、植物に関する解説や監修は植物分類学・資源植物学の研究員、また歴史、文献など人文系の資料に関しては司書、また植物の生態展示に関しては園地管理スタッフというように、職員間の相互の協力によって展示を構築しています。その点が通常の博物館の展示制作業務との違いではないでしょうか。

「世界のスパイス展03.10.12～04.1.18」

この展示は「植物からの贈り物シリーズ」の第一回として開催されました。調味料、香辛料として日頃見慣れているスパイスを植物資源としてとらえてもらい、植物の人間社会への多様な貢献の姿を知ってもらうことが目的です。スパイス自体は乾燥させた植物の部分に過ぎません。その物体に潜む力やそれにまつわる物語をいかに引き出すかが展示デザインに求められる課題でした。また、これまでもさまざまな場所でスパイスの展示はやられているので、それらを参考にしながらも牧野植物園ならではの特徴をいかに出すかということも課題でした。

（自然科学に人間味を）

「植物の人間生活への貢献を伝える」ためには人間の英知の歴史（人が生きていくために身の回りのものを観察し、利用してきたこと）の素晴らしさに共感を持ってもらう必要があります。展示では物言わぬスパイスの潜在的ドラマを引き出すために、その利用や流通の歴史をミイラや帆船の模型などを使い表しました。またインド人家族の食卓風景の再現やエスニックな料理サンプルとそのレシピなど、人間味のある展示をほどこしました。入り口に設置した「とあるアジアのスパイス商店」には職員が国内外、さらに日曜市などで買い集めた三〇〇種類以上のスパイス商品を陳列して一軒の店を作り、展示という非日常空間へのプロローグとしました。当園では自然科学の展示に人文的要素を、人文系の展示に科学性や実証的データという相反する要素を意識的に適宜盛り込むようにしています。また学術的な展示の際に少しだけポップな表現を忍ばせることなども展示をより豊かなものにする技法であると考えています。

導入展示「とあるアジアのスパイス商店」

（五感に訴える展示）

展示表現はどうしても視覚効果中心のものになりがちですが、今回はテーマがスパイスなので五感に訴える展示を心がけました。（聴覚）現地で入手したインド音楽のBGM（嗅覚）展示空間に漂う一〇〇種以上のスパイスの芳香や香り体験コーナーの設置（触覚）スリランカから取り寄せたシナモンの束など実物に触れる（味覚）隣接するカフェでの企画展特別メニューのアジアンカレーなど。そしてもちろん植物の分類学的情報、スパイス植物のボタニカルアート、少し掘り下げた展示として一五〇種以上のトウガラシのサンプルとその文化史、一二〇種類のペッパーミルコレクションの展示もおこないました。

（生きた展示）

展示ロビーにはスパイス植物のガーデニングをほどこしました。厨房で見るコショウの容器からは生き物としての植物は想像できません。ここに来て初めて人々はコショウが植物から出来ていたことを思い出したことでしょう。秋から冬の寒い時期に、主に熱帯の植物を日光の入らない室内で展示することは難しく、園地管理スタッフの腕の見せ所でした。この生態展示は植物園ならではの展示になりました。

このように牧野植物園では異分野の職員たちと互いに連携して展示を作っていますが、今後ミュージアムネットワークの各施設の方々の経験や技術との連携で展示を作ることが出来れば、さらに味わい深い豊かな企画展が生まれてくるのではないでしょうか。展示に限らず物作りは異分野の要素がうまく組み合わさったときに良質のものが出来上がるように思います。

（高知県立牧野植物園
学芸職員・展示デザイナー）

展示会批評

「文学・青春展」

高知県立文学館では、二〇〇三年度企画展として、二〇〇四年二月十一日（水）から三月二十一日（日）までの間、「文学・青春展」を開催した。同展示会は、日本近代文学館、菊池寛記念館との巡回展示的位置付けで行っているが、それぞれの館で郷土出身作家のコーナーを充実させるなど、独自的要素を打ち出している。特に県立文学館では、中村稔先生（日本近代文学館理事長）の監修と津田学芸員の御努力により、文学史的流れを重視した時系列展示を再構築し、「愛と性」、「思想と社会」、「戦争と青春」、「青春彷徨」の四部構成とするテーマ展示にあざやかに生まれ変わっている。展示会場に入ると、八十八人の作家の直筆生原稿から伝わる魂の迫力や、挿絵やイラストが魅力的な当時の初版本の存在感に圧倒されつつも、展示キャプションの、簡潔ではあるが水準の高い内容と、視覚的、立体的な工夫がなされた展示手法に次第に引きつけられていった。

展示空間にいる間、私は神田駿河台にある大学の門をくぐった頃の自分を、いつしか想起していた。当時大学は、多摩移転反対闘争が最も燃え上がった時期にあり、入学式の時もロックアウトによる厳重な警戒体制下にあった。学生運動はなやかなりし頃の、最後の残り火の世代である。大学の授業がロックアウトにより中止になると、通う先はいつも神田古書店街と近くの喫茶店であった。神田古書店街では、ろくに金もないくせに安い文庫本ではなく、前の持ち主の人生を感じさせてくれるような、それでいて少しでも装幀や挿絵のきれいな古書を探し、そこに小市民的ロマンを感じていた。今回の展示会で見た佐多（窪川）稲子、小林多喜二、柴田翔、高橋和己、五木寛之などの作品は、いずれも神田古書店街で買い求め、大正期建築の風情を残す「ラドリオ」という喫茶店で、読みふけった思い出がある。その時読んだ内容はほとんど覚えていないが、確かなかたちで「内在化」したと今でも感じている。

現代社会は急速にデジタル化が進んでおり、一定料金を支払えば、いつでもどこでも携帯電話やパソコンで読書ができる時代である。しかし基本的にアナログ派の自分にとって、読書をインターネット情報で行うことは、「アンビリーバブル」な行為である。なぜなら情報をダウンロードすることはできても、実存的感性までもダウンロードすることはできないから。

柴田翔の作品に、左翼運動の混乱の中、生きる方向を見失った若者の痛みを描いた『されどわれらが日々』という作品がある。この作品に「（古本屋で）私は題名を読むよりは、むしろ変色した紙や色あせた文字、手ずれやしみ、あるいはその本の放つ陰影といったもの、を見ていたのだった」という一節があるが、私自身これと近い思いで集めた古書は、今でも手放すことができない。

展示会を見終わって帰途についた私は、思い出のある何冊かの古書を引っ張り出し、読み返している自分を発見した。多忙な現代社会の中、自らの青春時代を振り返り、人生を見つめ直す機会を与えてくれるような展示会は少ないが、県立文学館の「文学と青春展」は、私にとってそのような展示会のひとつであった。

（高知市立自由民権記念館　氏原和彦）

図書の窓

『地域に生きる博物館』

徳島博物館研究会編
教育出版センター
二〇〇二年　二、八〇〇円

本書はタイトルにもあるように、地域の中で地道な仕事を続ける徳島の学芸員さんたちの活動の記録である。

内容としては三部構成となっており、Ⅰでは「博物館の広がり」として、博物館と利用者・類縁機関等との連携の在り方を探る八本の論考、Ⅱ「博物館の組織と学芸員」では、学芸員の視点から博物館の組織・運営に関する問題を論じた四本の論考、Ⅲでは「博物館資料をめぐる諸課題」として、資料の目録・整理の問題や、取り扱いに慎重を要する資料に関する問題等を論じた七本の論考が収録され、巻末には特別寄稿として、長く徳島県の博物館界で活躍してこられた天羽利夫氏の文章が収められている。

収録された個々の論考は、それぞれがしっかりとした理論と実践とに裏付けられたものばかりであり、徳島博物館研究会の水準の高さを改めて実感させられる。

図書館に勤務する自分としては、博物館や学芸員さんたちと連携した図書館での展示や文化事業の在り方をレポートした鞆谷純一氏の論考や、今あらためてその在り方が問い直されねばならない「図書館の自由に関する宣言」について、その成立過程をまとめた新孝一氏の論考に関心を持った。

特に鞆谷氏の論考中、図書館の事業を博物館等と連携して行うことに関して、「他業種の専門職（学芸員等：筆者注）から刺激を受けることによって、司書のあり方を改めて考えるよい機会になる。」という言葉には、うなずけるものがある。

こうちミュージアムネットワークの会員館を見ると、まだまだ図書館の参加は少ない。そういう意味でも、本書は図書館の司書の方々にもぜひ読んでいただきたい一冊である。

（高知県立図書館　渡邊哲哉）

情報コーナー

会員募集

●こうちミュージアムネットワーク●

こうちミュージアムネットワークでは、随時入会の申し込みを受け付けています。現場に役立つ様々な事業を実施しています。

【資格】

①法人会員

・文化施設（博物館・資料館・美術館・図書館のほか、資料の収集、研究、保存、展示を行っている施設）

・文化行政機関

・教育機関

②個人会員

・法人会員に適する機関に属する個人

【会費】

無料

【申し込み方法】

・入会申込用紙に必要事項を記入の上、事務局にファックスで申し込み。

・事務局

高知県文化環境部文化推進課芸術文化班

電話（〇八八）八二三―九七九三

ＦＡＸ（〇八八）八二三―九二九六

（ホームページに申込書雛形掲載）

●のいち動物公園友の会●

のいち動物公園友の会では、新規会員を募集しています。

【特典】

①年５回以上の例会の開催「園内ガイドツアー」「ホタルの観察会」「親子飼育体験」他

②動物公園のカレンダーや機関誌の配布

③動物公園でのイベント等のお知らせ

【年間会費】

個人会員　二、〇〇〇円

家族会員　四、〇〇〇円

【申し込み方法】

専用の振り込み用紙が必要ですので、お電話でお問い合わせ下さい。

のいち動物公園友の会

電話（〇八八七）五六―三五〇〇

展示会

●特別展「安芸のおひなさま」●

会期　平成十六年二月二十日(金)～平成十六年四月十一日(日)

時間　午前九時～午後五時

（入館は四時三十分まで）

休館日　毎週月曜日

入館料　一般　三〇〇円

中高生　一〇〇円

小学生　五〇円

会場　安芸市立歴史民俗資料館

電話・ＦＡＸ（〇八八七）三四―三七〇六

作品募集

●香北町立吉井勇記念館年間表彰作品（短歌・俳句）募集●

当館への投稿作品に対して年間表彰を行います。毎年、三月末締切。四月に表彰を致します。継続的に作品募集を致しますのでご応募下さい。

応募方法　ハガキ・封書・ＦＡＸ可。郵便番号・住所・氏名（本名）を必ず明記。

作品数制限なし。作品はすべて楷書ではっきりと読みやすく書いて下さい。

宛先　吉井勇記念館年間表彰係

〒七八一―四二四七

高知県香美郡香北町猪野々５１４

ＦＡＸ（〇八八七）五七―五九九五

図書出版案内

●『土佐國群書類従』第６巻伝記部●

土佐関係の史料集成です。九、〇〇〇円（送料別途三四〇円）。既刊分第一巻～第五巻も好評発売中。

詳細は高知県立図書館　電話（〇八八）八七二―六三〇七まで。

※16年度幹事館

会員一覧

［会長：高知県立歴史民俗資料館館長・坂本正夫］

安芸市立書道美術館
安芸市立歴史民俗資料館
いの町紙の博物館
絵金資料館
ＮＰＯ法人高知こどもの図書館
香北町立やなせたかし記念館
香北町立吉井勇記念館
窪川町立美術館
高知県立足摺海洋館
高知県立坂本龍馬記念館※
高知県立図書館※
高知県立のいち動物公園
高知県立美術館※
高知県立文学館※
高知県立埋蔵文化財センター
高知県立牧野植物園※
高知県立歴史民俗資料館※
高知市生涯学習課
高知城懐徳館
高知市立自由民権記念館
子どものための民具体験館
吾北村中央公民館
金剛頂寺霊宝館※
佐川町地質館
定福寺
宿毛市立坂本図書館
宿毛市立宿毛歴史館
須崎市立須崎図書館
竹林寺宝物館
土佐足摺さんご博物館
土佐市立市民図書館
土佐豊永万葉植物園
土佐山内家宝物資料館※
中岡慎太郎館
中村時計博物館
はらたいらと世界のオルゴールの館
春野町立郷土資料館
平和資料館草の家
木遊館　樹華夢
横倉山自然の森博物館
横山隆一記念まんが館※
龍河洞博物館
龍馬歴史館
わんぱーくこうちアニマルランド

個人会員

林　一　將（古渓城）

こうちミュージアムネットワーク通信
第２号

平成16(2004)年３月31日

編　集　こうちミュージアムネットワーク企画調整部会（高知県立坂本龍馬記念館・横山隆一記念まんが館・財団法人土佐山内家宝物資料館）

事務局　高知県文化環境部文化推進課芸術文化班

電　話　０８８－８２３－９７９３